

2. 城南織物の再起

新しいロゴマーク「すいせいゾウ」の誕生と城南織物の再起

ようやく戦争が終結し、いよいよ再起に向けて始動というときに亀太郎氏が体調を崩したため、戦後の陣頭指揮をとったのは正秋氏であった。正秋氏は、手元のお金をかき集め、それでも足りない部分は親戚から借りてなんとか必要な資金を用意した。「現金を腹巻きに巻いて遠州織機を買いに行った」というエピソードからは、正秋氏が再起に向けてどれほど情熱を注いだかがわかる。このときいくつかの新しい試みも企図された。

まず、1948年に正秋氏が2代目社長となり、城南織物工場を城南織物(株)に改称し、個人事業所から株式会社に改組した。また、戦中に拠出した工場が「彗星」の製造所だったことから、戦前使っていたロゴマークの「ゾウ」印に改良を加え、「すいせいゾウ」印を誕生させた。そして、1953年にはタオル製造に着手するために樹之本工場を新設し、城南織物では綿ネル、広幅綿織物、タオルの3つの綿織物の製造をおこなうようになった。




戦後のロゴマーク（左）と現在のロゴマーク（右）。

いずれも「ゾウ」の上に「彗星」が輝いている。


タオル製造開始の背景には、戦後、今治地域でタオル製造が定着

しつつあったことに加えて、タオル織機を手に入れるタイミングもあった。戦争終結後、戦前から日本経済を支えた平和産業である織物業は徐々にその生産量を増やしていき、1950年代に入るとすでに生産過剰による生産設備統制が敷かれていた。1952年の「特定中小企業の安定に関する臨時措置法」（中小企業安定法）は、①織機の登録、②未登録織機での生産禁止、③織機の増設禁止、④生産量の制限（タオルは3割操短）をおもな内容としており、タオルを含め織物業の新規参入は容易ではなかった。

しかし、1953年3月に吉田茂内閣の「バカヤロー解散」によって衆議院が解散し、上記の臨時措置法のあとにつづく新法制定が見送られたため、1954年の「タオル製造業生産設備制限規則」および「未登録タオル織機設備制限規則」（同年4月から施行）制定までのわずかの間にタオル織機を購入できた。1953年に新しく建てられた樹之本工場は、タオルを織るために設置された工場だった。タオル製造開始にあたっては、今治地域ではタオル製造の先駆者のひとりである田中産業（株）創業者の田中良太氏に便宜を図ってもらい、ことのほか世話になった。

3. 3代目としてタオル業界に入る

平尾浩一郎氏は、1951年12月9日、今治市とりゅう鳥生で父・正秋氏と母・美智子氏の間で次男として生まれた。父親の正秋氏は、亀太郎氏の長男であり、「城南織物工場」の2代目として時代の変化を繊細に捉えながら市場ニーズに沿った製品を生産し、戦前・戦後の激動の時代を乗り越えてきた。とりわけ、綿ネルや広幅綿織物を国内外向けに生産し、綿ネルにおいては昭和20年頃から足袋の底生地として埼玉県行田市方面にも販路を持っていた。

平尾氏の両親は1946年に結婚し、その際に式を挙げたのが八木亀三郎  の邸宅・八木邸であった。近代の今治財界のドンであった「八木亀三郎」の名は地元ではあまりにも有名である。平尾氏が

会長（2016年～2017年〔第83年度〕）を務めた今治ロータリークラブの歴代会長には、阿部^{ひでたろう}秀太郎[☞]や滝^{たきいさお}勇[☞]など今治財政界の錚々たるメンバーが顔を連ねているが、彼らを育て今治の近代化の基盤を作った人物が八木亀三郎である。今治ロータリークラブは1934年に産声を上げ、正秋氏も1974～1975年（第41年度）に会長を務めている。

由緒ある邸宅で式を挙げて結ばれた正秋氏と美智子氏には、次男の平尾氏の他に、長女・雅子氏、長男・雄三氏、三男・史郎氏がおり、4人の子宝に恵まれた。次男の平尾氏は、「跡取り」というプレッシャーのない中で好きなことに没頭しながら伸び伸び育った。幼少の頃はよく織物工場に遊びに行って、機械に囲まれながら遊んでいた。モノづくりは大好きで、プラモデルに無我夢中だった。今治市立






八木邸にて

立花小学校に入学すると、毎日夜空を見上げて星を観察する天文少年になった。天文観察に拍車がかかったのは小学校5年生のときに望遠鏡を買ってもらってからであり、それ以来ますます星の虜になった。この頃から宇宙への憧れが沸々と湧いていた。

中学校と高校は松山市にある愛光学園の「愛光寮」と「トマス寮」で過ごし、自由な校風のもとで男子校生活を楽しんだ。国語の時間をおしてよく本を読むようになり、やがて読書少年になった。愛光学園の国語の授業では、一年間で終える教科書を10ヶ月程度で終了し、残りの2ヶ月を読書にあてられた。このような国語の時間が3～4年ほどつづき、平尾氏にとって読書は歯磨きと同じように日常生活の一部となった。この時代に漁るように読んだ本が、戸川幸夫[☞]の『高安犬物語』や「動物文学」シリーズ、中島敦[☞]の『山月記』や『李陵』、太宰治の全作品など、おもに文学作品であった。

中・高校ですっかり文学少年になった平尾氏であったが、1969


年4月に埼玉大学理工学部物理学科に進んだ。小学校のときに抱いた宇宙への憧れがふたたび甦った。平尾氏に火を付けたのは、1949年にノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹  であった。戦後、日本中が復興に懸命だった時代に日本人のノーベル賞受賞のニュースは、たいへんな盛り上がりを見せ、多くの人びとを元気づけた。その後も長らく物理学ブームがつづき、平尾氏もこのブームに乗った。「これっと思ったらまっしぐら」の平尾氏は、迷うことなく物理学を選び、大学では宇宙線（宇宙空間を飛び交う高エネルギーの放射線）の研究室に入った。同じ研究室出身者にノーベル物理学賞を受賞した梶田隆章  がおり、埼玉大学では名門のゼミで学問に励んだ。一方で、三度の飯より好きだった読書は相変わらずであり、大学時代は畑正憲  の本に熱中した。平尾氏にとって読書はライフワークであり、いつでもどこでも本は友だちであった。

「お前、帰ってこい」と言う父親の一言で、人生に転機

幼少の頃から興味あることに没頭して過ごしてきた平尾氏に、ある日、転機が訪れた。城南織物の跡取りとして周囲の期待を一堂に集めてきた平尾氏の兄・雄三氏が人生の選択として織物を選ばなかったのである。そこで3代目跡取りとして、平尾氏に白羽の矢が立った。父親から「お前、帰ってこい」と半強制的に声がかかったのは、城南織物で営業部長や取締役を歴任した番頭役の日浅弘^{ひろむ}氏が独立して織物工場を立ち上げる計画が浮上したときだった。

こうして、平尾氏は、長男に代わって急きょ城南織物を継ぐことになり、帰る前の1977年12月から1年間、城南織物の取引先であった大阪の老舗タオル専門問屋の(株)ヨシザキに修行に入った。読書家でもっばら理系の道を歩んできた平尾氏であったが、20代前半でタオルの流通・販売を学び、将来は経営者となるべく180度の転換を余儀なくされた。しかし、好奇心旺盛でチェレンジャーの平尾氏は、新しい世界に飛び込んでも怯まず、貪欲に知識を吸収

していった。そして、1978年に城南織物に入社し、半年ほど日浅氏に営業について指導を受け、タオル製造については独学で学んだ。幼少の頃からモノづくりに関心があった平尾氏にとって、製造のノウハウを学ぶことにはなんら苦ではなかった。

城南織物では、1973年頃より、人的ネットワークを生かしてカネボウ(株)  と契約し、クリスチャンディオールブランドタオルの生産をスタートさせていた。ほぼ同時期に、ジバンシィやイブサンローラン、ビエールカルダンなど他のブランドタオルもOEMによって製造を始めた。





城南織物本社

ブランドタオル生産と同時に、城南織物では工場の生産をタオルに集中させる戦略に打って出た。綿ネル、広幅綿織物からタオルへの転換はさほど難しいものではなかったが、クオリティの高いタオルをつくるには技術的な努力を必要とした。これに一役買ったのがカネボウであった。クリスチャンディオールの代理店だったカネボウの要求するタオルは、城南織物がそれまでにつくっていたタオルとはクオリティに差があった。カネボウと契約した当初、製品の70%がB級品扱いとなり、カネボウから検査員が工場に来るたびに何度もだめ押しされた。これによって城南織物は技術的に相当鍛えられ、高い品質のタオルを製造できるようになった。

ブランドタオルの流行に後押しされるように、1978年頃には設備を増設し、(株)豊田自動織機のシャトル織機「トヨタ GLT-8型」（通称、「トヨタ 8」）を導入して生産性の向上を実現した。その結果、1980年には会社設立以来の売上を記録した。

好況のタオル業界にさらなる好機が訪れた。「バブル経済」である。バブル経済が始まった1985年、平尾氏は専務取締役就任した。城南織物では、長期計画のもとで革新織機が24台収容できる東工場が新設された。将来的には樹之本工場に設置してあるシャトル織機を生産性の優れた革新織機に入れ替え、競争力を高める目論みで

あった。東工場の完成時には豊田自動織機製のスルーザー織機4台と小田井鉄工(株)  (現・(株)オティックス)製の整経機1台が設置された。整経機については地元の山本機料(株)  を窓口で購入、設置し、計画では革新織機を20台以上の設備規模を想定していたため、1台当たり3~4千万円規模の大型を置いた。一方で、1953年に建てられた樹之本工場は戦後の城南織物のタオル製造の主要工場としての役割を終え、1989年に閉鎖された。設備増強とブランドタオルの好調を受けて、城南織物は1991年に1980年の売上高を抜いて最高記録を達成した。(次号につづく)

